

Title	Ti-(50- χ)Ni- χ FeならびにFe ₃ Ptの電子構造と構造相変態
Author(s)	山本, 琢也
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/48600
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	山本 琢也
博士の専攻分野の名称	博士(工学)
学位記番号	第 22026 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 工学研究科マテリアル生産科学専攻
学位論文名	Ti-(50-x)Ni-xFe ならびに Fe ₃ Pt の電子構造と構造相変態
論文審査委員	(主査) 教授 掛下 知行 (副査) 教授 弘津 禎彦 教授 中谷 亮一 准教授 福田 隆

論文内容の要旨

本論文は、Ti-(50-x)Ni-xFe 合金と Fe₃Pt を取り上げ、それぞれの合金に現れる二次的な構造相変態の起源についてその母相における電子状態に基づいて考察したものであり、以下の 7 章より構成されている。

第 1 章では、本研究の背景を述べた後、研究の目的と意義を述べた。

第 2 章では、従来 Ti-Ni 系形状記憶合金においてよく知られている R 相と、近年 Ti-44Ni-6Fe 合金において見出された整合相との関連を物性値測定ならびに電子線回折により調べた。その結果、整合相と R 相は本質的に異なる相であることがわかった。

第 3 章では、Ti-(50-x)Ni-xFe 合金 (x=6, 7, 8, 10) を用いて、これらの合金に現れる散漫散乱について調査した。その結果、いずれの合金においても冷却過程において散漫散乱が現れ始める温度は電気抵抗曲線が極小を示す温度 T_{\min} とほぼ一致しており Fe 濃度の増加とともに下がること、この散漫散乱のピーク位置は $q_d^{\max} = \langle \zeta_d \zeta_{d0} \rangle^*$ で表すことができ、 ζ_d は Fe 濃度の増加により小さくなり、温度の低下とともに 1/3 の位置に近づくことを明らかにした。

第 4 章では、散漫散乱を示す相への変態の原因として、Ti-(50-x)Ni-xFe 合金のフェルミ面のネスティングに関して調査した。その結果、Fe 濃度が 20 at.% 以下の合金母相には $\langle 110 \rangle^*$ 方向にフェルミ面のネスティングが現れることを示した。また、そのネスティングベクトル q_n を一般化感受率 $\chi(q)$ のピーク位置として計算から求めたところ、 q_n は母相からの非整合相への転移温度付近における散漫散乱のピーク位置 q_d^{\max} と一致することが確認できた。このことから、非整合相への変態は B2 型母相におけるフェルミ面のネスティングが原因であることを示した。

第 5 章では、Ti-42Ni-8Fe 合金のフォノンを中性子非弾性散乱実験とバンド計算により求めた。中性子非弾性散乱実験から求めた $[110]^* \cdot \text{TA}_2$ フォノン分散曲線は、温度の低下とともに散漫散乱が現れる q_d^{\max} 付近において軟化を示した。一方、この実験結果に対応したフォノンの軟化はバンド計算によっても得られることから、フォノンの軟化もまた散漫散乱と同様にフェルミ面のネスティングに由来することを示した。

第 6 章では、L1₂ 型 Fe₃Pt に見られる L6₀ 型構造への二次的な相変態の原因を調査するために、その電子状態を計算した。完全規則状態においては、L1₂ 型構造が最も安定であり、相変態は生じないと示唆された。ところが、L1₂ 型構造のフェルミレベル E_F 直下に状態密度の鋭いピークが存在することから、バンド・ヤーン・テラー効果の存在が考えられる。実際、電子数を減少させ E_F をピークの位置に近づけると、L1₂ 型構造よりも L6₀ 型構造の方が安定

となる。規則度が下がることにより、 E_F はピーク位置に近づくことと予想されることから、不完全規則状態の Fe_3Pt で現われる L6_0 型構造への相変態の起源はバンド・ヤーン・テラー効果によると結論される。

第7章では、本研究で得られた成果を総括した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、形状記憶特性に優れた Ti-(50-x)Ni-xFe 合金 ($6 \leq x \leq 10$) ならびに近年強磁性形状記憶合金として注目されている Fe_3Pt において現れる二次的な構造相変態の起源を母相における電子構造の不安定性から考察したものであり、以下の知見を得ている。

(1) Ti-(50-x)Ni-xFe 合金 ($6 \leq x \leq 10$) における電子線回折図形の温度依存性を調査し、これらの合金では、温度低下にともない母相から非整合相への二次的な構造相変態が存在することを見出している。すなわち、非整合相は $\langle 110 \rangle$ 方向に現れる散漫散乱を特徴としており、その出現開始温度がこれらの合金において従来報告されている電気抵抗が極小を示す温度とほぼ一致することを明確にしている。さらに、この散漫散乱の最大強度を示す波数ベクトルの大きさは温度低下にともない大きくなること、ならびに Fe 濃度の増加にともない小さくなることを見出すとともに、この散漫散乱はバルク試料においても現れることを中性子回折実験により確認している。

(2) Ti-42Ni-8Fe 合金を用いて中性子非弾性散乱実験を行い、この合金における母相から非整合相への変態に前駆して TA_2 フォノン分枝が温度低下にともない軟化すること、ならびにこの軟化が起きる波数ベクトルと散漫散乱が最大強度を示す波数ベクトルとが一致することを見出している。

(3)上記した母相から非整合相への相変態の起源を明らかにするために、 Ti-(50-x)Ni-xFe 合金母相の電子構造、およびそれをもとにして一般化感受率を計算し、この系においてフェルミ面のネスティングが存在すること、ならびにそのネスティングベクトルが電子線回折図形における散漫散乱の最大強度を示す波数ベクトルと良く一致することを示している。また、 Ti-42Ni-8Fe 合金に見られる TA_2 フォノン分枝の軟化は、電子構造を用いて計算したフォノン分散関係から説明できることを示している。以上の結果から、 Ti-(50-x)Ni-xFe 合金における母相から非整合相への変態がフェルミ面のネスティング効果に由来することを明確にしている。

(4)規則度が 0.8 近傍の Fe_3Pt において生じる L1_2 型の立方晶から L6_0 型の正方晶への二次的な構造相変態の起源がバンドヤーンテラー効果によるものであることを、電子構造の計算から明らかにしている。すなわち、 Fe_3Pt の L1_2 型規則構造におけるフェルミエネルギー近傍の高い電子状態密度が、正方晶に歪むと分裂し、エネルギーの低い状態に電子が入ることにより、 L1_2 型構造よりも L6_0 型構造が安定化することを示している。

以上のように、本論文は Ti-(50-x)Ni-xFe 合金ならびに Fe_3Pt に現れる二次的な構造相変態の起源をそれらの母相における電子状態をもとに明瞭にしたものであり、学術的にもまた形状記憶合金の特性を向上させるためにも、極めて有用な知見を含んでおり材料工学に寄与するところが大きい。

よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。